

共生的アローン（経路からの知らせ）

清水葵衣

23区内で目的地の最寄りに降りるのは腑に落ちないから飯田橋から川を伝った。

無線イヤホンから流した渋谷系のおかげで私の白い日傘はご機嫌！

ビル風にあおられながら上下に揺れている。

紺の墨がほとはしる

その墨は星の子で、ときに人をぎゅつと苦しめる

人工的な緑地や、ふと迷い込む静かな住宅地に、どこか好きで騙されているふしがある。だって本物なんて知らないもの。ベッドタウン出身の何が悪い？ 地方っておかしな言葉じゃない？

君はそうして生み出されて、やはり真っすぐ見つめる

嫌になりはしない

きつとしばらくはこの宇宙の中

広い道路の反対側で、姿勢よく並走するもう一人がいた。

左右盲だから、どちらが逆走なのかを知らない。縦列駐車だってうまくできない。

次見たときにはいなくなっていたもう一人のことを思いながら、知りもしないし馴染みもない道をゆくのです。

それでどうしてか私は、いつだって元気になるのです。

君は孤独を大切に抱えていて

それはおそらく生命線だから
手放さなくていいのだ

建物ばかりの場所ではおどる日傘の出番はなくて、汗のにじむ手のひらにたたまれて収まるばかりになってしまった。私も影にすっぽり収まった。ひんやりとしたセイロンティーを身体はぐんぐん吸収する。おいしいお茶の魔法に何度も何度も助けられている。

融合と分離を繰り返して、暗闇が見つけられたり、作られたりする
そうしてあるとき小さな破裂音がして
よりよくなってゆく不思議

良いものをたくさん見た。それはとても大きくて赤い絵。楓が描かれた屏風。きめの細かいレース。派手な女に何かを解説する純朴な男。演歌歌手のグッズ列。作品がぶら下がるアトリエ。小さな段差につまずく自分。明日のために、足を上げて眠った。優しい人が夢に出た。いい目覚めだった。

目まぐるしく変化する関係のなかで、人々は、
そっと他人のためにはたらき、再び孤独に寄りかかる
上手に他人を愛して、やがて寂しさを求める

ごく正しいサイクルは人々を悩ませて
その中心は人々を笑う
その折々で人々も笑う
ごく正しいサイクルが人々を、
潤して、ずっと新しくするとき
他人と純に相對させるときに